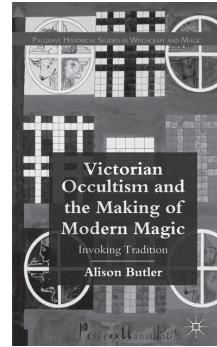


## 書評

### Alison Butler, *Victorian Occultism and the Making of Modern Magic: Invoking Tradition* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2011)

浜野 志保



パリ大学で医学の学位を取得したアンナ・キングスフォード (1846–1888) は、女性科学者の先駆けであると同時に、肉食主義の普及や動物の権利運動に尽力する社会運動家でもあり、スピリチュアリズムや神秘思想にも傾倒していた。1887年、彼女は「生体解剖の悪魔」と呼んで目の敵にしていた生物学者ルイ・パスツールを、魔法によって殺害しようと目論む。その術が効いたのか否かは定かでないが、パスツールは病に倒れ、生死の境をさまようことになる。科学者であるはずのキングスフォードは、なぜ、怨敵を殺害するための方法として、非科学的きわまらない“魔法”を選択したのか――。

かつてマックス・ヴェーバーは、「世界の脱魔術化 (Entzauberung der Welt)」と「合理化 (Rationalisierung)」という二つのキーワードによって、西洋近代に固有な精神の形成過程を解き明かした。このヴェーバーによる「脱魔術化」テーゼは、産業社会から消費社会へと社会の様態が変化し、人々の行動原理が合理性から逸脱しつつある現代に対しては適用しがたく、最近ではむしろ、モリス・バーマン『デカルトからベイトソンへ』(1981)、ジョージ・リッツァ『消費社会の魔術的大系』(1999)、クリストファー・パートリッジ『西洋の再――魔術化』(2005)など、消費社会や現代芸術における「再魔術化」論のほうが隆盛である。

とはいえ、こうした現代の分析としての「再魔術化」論の流行は、ヴェーバーの議論そのものが全方位的に無効になったことを示すものではない。とりわけ、西洋近代における“オカルティズム”の流行について論じようとするれば、この「脱魔術化」テーゼを無視することは未だに難し

い。ヨーロッパ中が「脱魔術化」へと向かっていたはずの十九世紀末から二十世紀という時期に、何故、あれほど多種多様な“オカルティズム”が生まれ、多くの人々を魅了したのか。

近年、文化史研究の領域では、スピリチュアリズムや心霊研究、神智学など、西洋近代における多種多様な“オカルティズム”を、「脱魔術化」の潮流に相反するものとしてではなく、むしろ「脱魔術化」を含む近代精神の産物と捉える議論が増えてきた。代表的なものとしては、十九世紀末から第一次大戦以前の英国オカルティズムを近代的な知のあり方と結びつけたアレックス・オーウェン『幻惑の地』(2004)、1870年代から1940年代にかけてのドイツ・オカルティズムと近代精神の生成過程を重ね合わせたコリンナ・トライテル『魂のための科学』(2004)、マルティニスト団の思想や政治活動からフランス啓蒙主義の一側面を明らかにしたデヴィッド・アレン・ハーヴェイ『啓蒙の彼方』(2005)などが挙げられる。これらの優れた研究により、西洋社会における“近代オカルティズム”とは、“近代化”の流れに逆らうものではなく、むしろそのプロセスの一部であるという側面が、少しずつ明らかにされてきた。

ところが、ここで新たな問いが生じる。言うまでもなく、近代よりもはるか以前から、西洋には脈々と連なるオカルティズムの歴史が存在する。果たして“近代オカルティズム”は、“近代”という時代背景によって全てを規定されるような、純然たる“近代”の産物と言えるのだろうか。科学者でありながら魔術師でもあるキングスフォードのような人物を生み出した“近代オカルティズム”は、錬金術やウィッチクラフトなどの前近代オカルティズムとは、まったくの別物なのだろうか。

この問いに対して、一つの答えを示してくれるのが、歴史家アリソン・パトラーによる本書である。パルグレイヴ・マクミランの *Palgrave Historical Studies in Witchcraft and Magic* シリーズの一冊として刊行された本書は、ヴィクトリア朝期のオカルティズムを、当の時代という文脈のみならず、西洋魔術の連綿たる伝統の内にも位置づけることによって、その本質を浮き彫りにしようとする。“ヴィクトリア朝期のオカルティズム”といっても多種多様であるが、本書で主に論じられているのは、1888年に結成され、W・B・イエイツも参加していた秘密結社「黄金の夜明け団

(The Hermetic Order of the Golden Dawn)」である。

黄金の夜明け団の名前は、むしろアカデミズムの外部において人気が高い。占い好きであればアーサー・エドワード・ウェイトの「ライダー・タロット」や、アレクスター・クロウリーの「トート・タロット」等のタロット・カードを經由して馴染みがあるだろうし、ヘヴィ・メタルのファンであれば、オジー・オズボーンの名曲「ミスター・クロウリー」(アルバム『ブリザード・オブ・オズ—血塗られた英雄伝説』[1980]に収録)を思い出すに違いない。陽気な西海岸ロックが音楽シーンを席卷しつつあった80年代初頭に、陰鬱な旋律と共に魔術師クロウリーを召喚したこの曲には、次のような一節が登場する。

Mr. Crowley, won't you ride my white horse

Mr. Crowley, it's symbolic of course

いみじくもこの一節に示されているとおり、黄金の夜明け団の教義は、いかにも秘教的な象徴主義に満ちている。その中心に位置するのはカバラの思想であるが、フリーメイソン、エジプト神話、薔薇十字や東洋哲学、グリモワールなどの様々な要素が(バトラーの言葉を借りれば)「総合(synthesize)」され、独自の体系を成している。こうした独自の象徴主義が、ロマン主義以降の空気と共鳴し、あるいは、科学的な客観性を重視する風潮に逆らい、イエイツをはじめとする同時代の芸術家たちを魅了した。

このような総合的な象徴体系の成立に際しては、かつてフランシス・キングも指摘したように、「魔術のおよび錬金術的伝統、タロー解釈、それにほとんど知らないヘブル・カバラをロマン主義化した」フランスの魔術作家エリファス・レヴィ(1810-1875)の影響が大きかった。<sup>1</sup>レヴィの名前は本書にもたびたび登場するが、特に重要なのは、創設者の一人であるウィリアム・ウィン・ウェストコット(1848-1925)が、牧師A・F・A・ウッドフォード(1821-1887)から受け取った古文書に関するくだりである。この古文書をウェストコットが解読したところ、そこにはカバラにおける「生命の樹」とタロット(タロー)との関係が書かれており、こ

れが黄金の夜明け団の設立の契機となったと言われているが、両者の関係について初めて指摘したのは、他ならぬレヴィである。

さらに、黄金の夜明け団の創設に関わった人々の内、ウェストコット、マクレガー・メイザース（1854–1918）、ウィリアム・ロバート・ウッドマン（1828–1891）の三名は、英国薔薇十字協会の会員であった。1865年に設立されたこの協会は、フリーメイソンリー会館で発見されたという古文書を基礎とする、メイソン系の薔薇十字団体である。フリーメイソンリーと薔薇十字とを結び付ける見方は、少なくとも十七世紀中には生まれていた。さらに十九世紀半ばには、メイソン薔薇十字の中に、エジプト魔術や東洋哲学の要素が加わっていく。

カバラやフリーメイソン、薔薇十字、エジプト魔術などの秘教には、それぞれの伝統がある。黄金の夜明け団の教義は、そうした伝統に依拠しながらも、それらを近代的な解釈のもとに総合し、新たな象徴体系として構築したものである。世俗化が進み、科学的な自然観が普及していった時代に、メイザースをはじめとする黄金の夜明け団の創設者たちは、新たな体系を一から作るのではなく、複数の伝統を「総合」することによって、自分たちの教義に正統性を付与した。この過程を、バトラーは「伝統の発明（the invention of tradition）」と呼んでいる。

また、冒頭で紹介したキングスフォードを、バトラーは「オカルティズムに与したヴィクトリア朝社会の周縁部を代表する人物」として序文に登場させているが、これには大きな理由がある。黄金の夜明け団は、儀式魔術を実践する秘密結社であるが、その教義の伝達に用いられたのは、文書や書物などの文字メディアだった。口伝えによって教義が伝承される昔ながらの魔術とは異なり、黄金の夜明け団の教義を学ぶためには、それなりの教育を受け、独学によって知識を得ることが出来なくてはならない。逆に言えば、かつては小さなサークルの中に閉じ込められていた魔術の知識が、文字メディアを介すことで、教育を受けた中流階級に対して広く開かれることになる。

魔術の伝統をそのまま継承するのではなく、いくつもの伝統の中から新たな伝統を発明したという点において、黄金の夜明け団の教義は、きわめて十九世紀的な「進歩と進化という概念を、総合という形で具現化した」

ものである。さらに、そのようなプロセスを経て生み出された教義の継承が、“中流階級”の拡張と共に勢力を伸ばした文字メディアを介して行われたという点にも、ヴィクトリア朝という時代の色が濃厚に現われる。

文化史的な視点からの研究が急速に充実しつつあるスピリチュアリズムに比べ、黄金の夜明け団に関する研究はそれほど多くないが、近年の研究の中で本書と好対照を成しているのは、やはりオーウェン『幻惑の地』だろう。オーウェンの議論が、先に挙げたキングスフォードに加え、ブラヴァツキー夫人や神智学など、オカルティズムに関わった様々な人物・団体に言及しつつ、基本的には同時代の文化や思想に目を向けているのに対して、バトラーは黄金の夜明け団に焦点を絞り、伝統とその継承という点に着目したことで、かえって世紀末オカルティズムの“近代性”が明確になっていくのが面白い。

また、黄金の夜明け団に関しては、日本でも1992年から93年にかけて、『黄金の夜明け魔法大系』（国書刊行会、全6巻）が刊行され、イスラエル・リガルディ『黄金の夜明け魔術全書』などの基本文献を邦訳で読むことができる。その中でも特に、第5巻にあたるフランシス・キング『英国魔術結社の興亡』では、黄金の夜明け団の結成前夜から分裂にいたるまでの歴史が詳らかにされており、本書を読む際の参考になるはずである。

## 注

1. フランシス・キング、江口之隆・訳『英国魔術結社の興亡』（東京：国書刊行会、1992年）、p. 25